季刊ジャネット
Ja-Net
Ja-Net は Japanese Network の略です。「にほんご」を通して情報と読者の情報を結び、相互理解にしたいと考えています。

No.24
2003年１月25日発行

●View from the Other Side 3
●あちこち日本語ご紹介［千葉県　市川市］ 4
●あちこち日本語ご紹介［フィリピン共和国 マニラ］ 5
●教材紹介『Basic Japanese for Students
はかせ　留学生の日本語初級45時間』 6
『改訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』 7
●なんでも情報BOX 8

スリーエーネットワーク

巻頭寄稿

遙かなる「移植日本語」を尋ねて

◆ 大阪大学大学院文学研究科教授
土岐　哲

はじめに

話は半世紀以上も前のことにさかのぼります。当事者が幸いにもお元気でいらっしゃることを考えれば「生渇きの歴史」とでも言える世界のお話です。先の大戦以前、日本は広大な植民地経営に乗り出し、そこで現地の子弟に日本語が教えられていました。その地域は、北の満蒙、南は赤道直下の西方から遠い東の島々までで、実際に行ってみるとよくもここまでと思えるほどの、それは広大な地域です。日本語が教えられていた期間は、地域によって数年から50年前後と異なりますが、戦後、その日本語がどうなったかについての調査や報告は、あまり多くありません。いろいろな事情があったからでしょうが、評価はともかく、事実は記録する責任があると思われます。そこで今回は、教育期間がもっとも長かった台湾、とりわけ先住民のことを中心に述べようと思います。

台湾先住民の言葉

台湾は、日本の九州ほどの大きさながら、北部は亜熱帯、南部は熱帯に属し、富士山よりも高い玉山（日本時代の新高山）を頂くという、文字通りさまざまな側面が凝縮された島です。そこに住む人々の言葉や風俗習慣も例外ではありません。今でこそ北アメリカの英語と同じで、漢民族の言葉が最大の言語になっていますが、その昔は、否、今日現在でも中国語以外の言葉で生活している先住民が大勢います。言語学大辞典によれば、ほとんど、あるいは既に消滅したと言われる10程の諸語を除いて、現在、台湾には、数え方にもよりますが12程の先住民語が残っているといわれます。これらの人々が他の部族の人々と話す場合、互いの言葉で意思の疎通を図ることは難しく、とくにお年寄りの間では、かつて習った日本語が共通語になっています。今日、伝統的な部族の言葉が話せるのもお年寄りが中心ですが、そのお年寄りが日本語も話すというわけです。多くの場合、これらの人々は３種類の名前を持っています。部族語の名前、日本時代の名前、そして今日の中国語の名前で、中国語名でなければ手紙も届かないのですが、中国語自体はあまり話せない人、諸事情から積極的に学ぼうとしなかった人も多いようです。一方、先住民の今の子供たちは中国語で育ち、部族の言葉を話す人が少ないようで、同じ家族でありながら、お年寄りと孫の会話が難しくなっています。これらは、ミクロネシア辺りでも聞かれることですが、けっして他人事などではありません。日本でも、方言主流社会に住む祖父母と都会に住む孫の関係を考えてみれば想像できるでしょう。実のところ、これは隠れた大問題です。

先住民の日本語

さて、一口に先住民の日本語とは言っても話し方はさまざまです。それぞれ母語の音韻体系やその他の環境条件によると思われる種々の特徴が聞かれます。その性質上、これらの特徴が生じた要因としては、次のようなことが考えられます。１）「日本語と学習者の母語の音韻体系の違い」、２）「教師自身または周囲の日本人の方言」、３）「学習者自身の価値判断」４）「日本時代終結以降の台湾内部の状況」などから来ると思われる特徴があります。概して先住民の日本語は、中国語諸方言や欧米諸語などより、音声表現の点ではずっと日本語に近いところがあります。日本語の中にも、方言主流の社会で、とくに老年層の間で話されている方言の中には、標準的日本語とはかなりかけ離れた話し方があります。そういう日本語のテープと、台湾の奥地で録音してきた日本語のテープを並べて学生たちに聞かせると、圧倒的に「台湾の方が分かりやすい」という答えが返ってきます。ただし、これにはちょっとしたトリック

があって、日本のお年寄りのテープは「仲間内の話し方」でしたから、分かりにくいのは当たり前だったのですが、では、その人に標準語を目指した「よそ行きの日本語」で話してもらっていたらどうでしょうか。いや、それでも「台湾先住民の日本語」に軍配が上がりそうな要素がいろいろあるのです。

モーラ言語とシラブル言語

台湾先住民最大集団のアミ語と最小集団のヤミ語の例で言えば、どちらにも母音の長短、子音の長短を区別して使い分ける機能があります。中国語話者や欧米語話者が標準的日本語の発音で苦労する「あれ」です。しかし、台湾の先住民は、ミクロネシアの人々同様、これで困ることはありません。単に「オジサン」と「オジイサン」、「来テ」と「切手」の区別がつきにくい程度には留まらず、日本語を話したり聞いたりするときのリズム全体に関わってくる重要なポイントです。話し手と聞き手双方の単語認識に差し支えるだけではなく、音声談話上の「ボタンの掛け違い」のようなことがだんだん溜まっていって困る要因になるものですが、それが問題にならないというのは大変有利なことなのです。次が母音です。アミ語もヤミ語も一部を除いては日本語の５母音との対応関係が比較的簡単で、問題になるとすれば、イ段位でしょうか。アミ語もヤミ語もアクセントパタンが一種類しかなさそうなこともありますが、これはフランス語話者や韓国語話者などの例から言っても珍しいことではありません。子音の点では、アミ語に清濁の区別がないのに対して、ヤミ語にはあり、この点では蘭嶼島に住む先住民最小集団ヤミ族の方が一層有利です。

ガ行鼻音の処遇事例から学べること

面白いのはガ行鼻音で、ヤミ語、アミ語、ミクロネシア諸語のいずれも簡単に発音できる条件は整っています。アミ族の人名の中には、日本語のガ行鼻音とまったく同じ音節が含まれていることや、ガ行鼻音で発音してみせると簡単に繰り返せることからも分かります。しかし、いずれの場合も自然談話でこれが聞かれることはありません。清濁の区別ができないアミ族の方言話者の中には、ガ行鼻音に該当するところがきれいにカ行音になってしまう人さえいます。これは、モデルとなった日本語が限定されていたことが原因のようにも考えられます。台湾総督府から毎年出されていた職員録には、台湾全土の学校毎に教員の氏名や出身県名が記載されていますが、それによると日本語のモデルとなったであろう教員のほとんどがガ行鼻音のない西日本出身であったことが分かります。恐らく無意識のうちに導かれた結果でしょうが、これらの事例は、私たちにさまざまなことを示唆しています。先住民が日本語を学んでいた学校や教育所には、教師がそんなに大勢はいませんでした。一歩外に出れば部族語の生活ですから、教師以外の日本語を聞く機会も多くはなかったことが窺えます。もし、教師自身に日本語についての幅広い見識があって、発音の仕方ですら必ずしも一色ではないことが分かっていれば、そして、生徒自身の持つ素材の多用性に気付いていれば、例えば、上記のアミ語方言話者に不要な苦労はさせなくても済んだように思われてなりません。「自分はガ行鼻音は発音しないが、東京辺り（当時）ではよく聞かれる発音だ」とでも伝え、当時あったレコード教材でも聞かせて、実例を示していたら、生徒が自信を持つきっかけになったかも知れません。ところが実際はその逆だったようです。しかもガ行音は、母音に挟まれると「有声摩擦音」で実現されることも多いのに、教室で「ガ、ギ、グ・・・」などと、生徒の不得意な「有声破裂音」で強調したきらいがあります。だからこそ、アミ語の方言話者のように、わざわざ努力して「リククン・カイクン（陸軍・海軍）」などと「カ行音」になってしまうような例が生じたという解釈も成り立ちます。このような「余計な苦労の例」は、まだあります。なぜそのようなことが起こるのでしょうか。ひとつは、意識するしないに拘らず、教室内では一種の力関係が働いて、「先生の仰ることが絶対」だったことが考えられます。当時の時代背景から考えて、止むを得ない点もあったでしょうが、もし、教師の側からもう少し幅を持たせた対処がなされていたら、違った結果になっていたかも知れません。教師自身「自分がすべてに優るのではない」という意識があって柔軟に生徒を観察し、工夫していれば、あるいは防げたことだったかも知れません。

教師が人様に自分の話す言葉を習ってもらおうとするとき、いつも考えなければならいことがあります。それは、自分自身がお手本の一つになってしまう可能性が大きいということの恐ろしさです。自分の何気ない話し方・書き方がそっくり真似され得ることを覚悟している教師はどれだけいるでしょうか。よく、教師は自分の経験したこと以外は教えられないと言われます。また、学習者は教師の鏡とも言われますが、ことの重大さに気付いている教師は、いったいどれくらいいるのでしょうか。たとえば、自分自身が話し方の訓練を受けて、うまくいかずに困った体験、作文をしながら、なかなか思うように書けずに苦労をした体験から、学習者のつらさが追体験でき、授業に反映させられる教師はどうでしょう。教師にとって何よりも大切な柔軟さは、そういう、自己のほろ苦い経験を昇華させたところからにじみ出て来るのではないかと思うのですが。

台湾東海岸の村で、詩吟やご祈祷(日本語）のうまいお年寄りに聞き取り調査をする筆者（左）。暑いので双方に水は欠かせない

土岐哲（ときさとし）
大阪大学大学院文学研究科教授
研究分野は日本語教育学、日本語音声学。「講座日本語の表現３　話しことばの表現（筑摩書房）共著」「多文化共生時代の日本語教育（凛々社）共著」「日本語中級J301（スリーエーネットワーク）共著」「日本語中級J501（スリーエーネットワーク）共著」など。

学習者の目　このコラムでは　学習者の視点での話題をお届けします

VIEW FROM THE OTHER SIDE

ミャンマーと日本の掛け橋になりたいです

ゾーミントン

３年前、日本に来ました

わたしの名まえはゾーミントンです。1999年12月に日本に来ました。はじめは日本へ行くつもりはなかったのですが、とつぜん日本に行かなければならない用事ができて来日することになりました。

日本に来る前に、ミャンマーで２カ月間日本語を習いました。習った場所は僧院の教室です。ミャンマーにいるときに習ったのは「です」「ます」という教科書にある文だったので、日本に来てから会話でよく使われる「～じゃん」や「～だもん」ということばがどういう意味かわからなくてこまりました。それから、ミャンマーには日本語の「つ」の音がないので「つ」を発音しようとすると「す」になってしまいます。そのために通じなくてくろうしました。また、ミャンマーで習ったときはローマ字だったので、ひらがな、かたかなも日本に来てぜんぶ覚えなければなりませんでした。

日本に来て感じたことは、とにかく便利なことです。車でどこでも行けます。ミャンマーではそうはいきません。ただ、ミャンマーではクラクションをやさしく「あぶないよ」という感じでならしますが、日本では「そこ、じゃま！」とおこった感じでならします。また、日本では仕事のあとでよくお酒を飲みに行きますが、ミャンマーではほとんどありません。日本とミャンマーの文化のちがいだと思います。気になることは外国人をいつもいやな顔で見る人がいることです。電車のこんでいるときなど、近づかないようにはなれていくのを感じます。

ミャンマーにいるミャンマー人たちの多くは、日本に行って働きたいと思っています。その理由は、10年前は日本の経済は世界で一番だったので、日本へ行けばお金をたくさんかせぐことができると思っているからです。はじめはわたしにはそのような気持ちはありませんでしたが、日本へ行くのが決まってから、日本へ行くのだからその機会を生かそうという気持ちになりました。そして、日本でくらすうちに日本語がわからないと生活がくるしく、つらくなるとわかりました。それで、2000年の２月におじさんの紹介でミンガラ日本語教室に来て日本語を勉強するようになりました。教室のみなさんのおかげで、今年わたしは能力試験の２級を受けるまでになりました。

日本語はむずかしいですが、おもしろいです

日本語にはひらがなとかたかなと漢字がありますが、わたしにとって一番むずかしいことは漢字です。しかし、それをあきらめないで、もっともっと勉強していこうと思っています。

日本のことばで興味があるのは、ぎおんご・ぎたいごです。それは日本人にとってはあたりまえのことばだと思いますが、わたしたちにとっては一つ一つ勉強しないとわからないことばです。漢字には「おんよみ」と「くんよみ」がありますが、とてもむずかしいです。

わたしは日本語があるていどできるようになると、これでまんぞくだ、と思うようになり、去年の今ごろ勉強を一度やめてしまいました。しかし、２カ月くらいたったとき、ここでやめると２年間勉強したことがムダになると思い直して、勉強を続けることになりました。

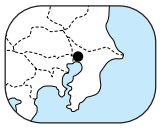
いまわたしはミャンマー大使館で働きながら、アルバイトもやっています。それに日本語の勉強も続けています。こうして続けているのもミンガラ教室の先生方のおかげです。これまでミンガラ教室で印象に残っている授業はたくさんあります。そのなかでも、「ねこに小判」などのことわざや、ぎおんご・ぎたいごのなかの「くよくよ」とか「ぐずぐず」などのことばを教えて下さったことです。

わたしには日本語をもっと勉強したい目標もできました。なにかというと、通訳になることや貿易の仕事をすることです。

ゾーミントン
1983年ミャンマーの首都、ヤンゴン生まれ。1999年12月来日。
花が大好きで、月に２回教会で花を活けている。

ミンガラ日本語教室：東京都内で６年前にミャンマー人対象に開設されたボランティア日本語教室。秋葉原など３つの教室に100名の生徒が集まり20名の教師が対応している。ビルマ（ミャンマー）語「ミンガラ」は「こんにちは」の意味。

あちこち日本語ご紹介 国内編



千葉県
市川市

「楽しく」をモットーに！

行徳日本語ボランティア「こんにちは」
太田三洋

行徳日本語ボランティア「こんにちは」です。市川市の行徳公民館で毎週土曜日の午前10時から12時まで活動しています。

会の成り立ちと運営概略

1994年から行徳公民館の主催講座として開かれている「日本語ボランティア養成講座」の修了者有志が母体となって生まれました。以後、メンバーの変動を重ねながらも今日まで活動を続けてきました。現在活動中なのは17名ですが、これまでに50名を超えるボランティアが「こんにちは」の運営に携わってきました。

会費は月200円を年に２回、半年分を一括徴収しています。学習者もボランティアも同額を支払います。市川市／行徳公民館の御好意で教室使用料が免除されていますので、費用面では恵まれています。

教科書は『新日本語の基礎Ⅰ・Ⅱ』を使っています。「養成講座」の教材ということと、対応言語の豊富さで採用しました。ただ、最近の養成講座が『みんなの日本語』に変わり、切り替えも検討しています。

毎週の学習には平均30人以上の外国人が参加しています。日本人ボランティアを合わせて常時50人前後が、公民館の集会室を埋めます。学習レベルにより４つの大グループ、その一部はもう少し細かく分かれて、全部で５～８のテーブルで学習しています。

浴衣を着て、盆踊りの練習をすることもあります

学習者の出身地は、現在出席している人達だけで約15カ国。つい最近はスーダンからの学習者も入りました。その他にも、30を超える国と地域から総勢600人を超える外国人が「こんにちは」の扉を叩いたことになります。４～５年前に比べると減ったようですが、今でも年間に120名以上の登録（更新も含む）があります。

日本語の学習以外にも、年に数回、交流行事として「パーティ」「遠足」などを行っています。この１年では「皇居一周ウォーク」や「浴衣着付け／盆踊り大会」など。このような行事には、学習者だけでなくその家族・友人などの参加も大歓迎です。

即日受け入れ、レベルによってグループに分かれて日本語を勉強しています

即入会、学習開始！

会の基本理念として「学習希望者（特に全くの初心者）は、原則としてその場で受け入れる」ことを掲げています。ここに来ることで「どこで日本語を習えるのか分からない」「日本語に接する機会がない」という不安が少しでも解消されるのなら、会の存在意義として充分だと思っています。

随時受入のために、毎週ボランティアが入れ替りで受付を担当しています。登録票への記入と、会費の支払を終えれば、適当と思われるグループで学習開始です。

ちょっぴり、悩みもあります

例えば、新規ボランティアの獲得です。公民館による「ボランティア養成講座」も最近は年２回が１回に減り、来年度以降は実施しないとも言われています。その中でボランティア仲間をどうやって増やしていくか、不安があります。ボランティアが少なくなれば、基本理念である「即日受け入れ」も不可能になる恐れがあり、深刻な問題だと思っています。

数年前には全国の公民館活動の中で「最優秀」を受賞した行徳の日本語ボランティアですが、時の流れなのか市の財政難の影響なのか、公民館側の我々の活動に対する理解・支援にも変化を感じます。何の不安もなく活動を続けるのは難しい時代のようです。

そんな中でも「楽しく」をモットーに活動を続けて行きたいと思います。是非、遊びに来てください。

あちこち日本語ご紹介 海外編

フィリピン共和国 マニラ

初心者からプロフェッショナルまで フィリピンを代表する日本語学校

日本語センター財団・フィリピン日本語文化学院 教育顧問
尾形健二郎

「比日協会」附属の姉妹校

「日本に留学したい」「日本で働きたい」「日本のアニメを理解したい」という若者から、「日本人と結婚したので、きちんとした日本語を話せるようになりたい」という主婦まで、フィリピンでは様々な人が様々な目的で日本語を勉強しています。このような多様な要望に応えるため、「日本語センター」と「フィリピン日本語文化学院」では、入門コースからプロフェッショナル・コースまで多様なコースを開設しています。

両校は、元駐日大使ホセ・Sラウレル三世が設立なさった「比日協会」附属の姉妹校で、マニラ市内にある「比日友好センター」内に設立されています。理事会、学長、校長ともに共通なので、実質的にはひとつの日本語学校と言えましょう。日本語センターは、在フィリピン日本大使館附属日本語学校を比日協会が引き継ぐ形で設立した学校で、初級、中級、上級の各コースがあり、日本語能力試験で言えば４級から１級まで対応できるようになっています。クラスは週１～３回、１回の授業時間は１時間半～３時間で、働きながら、あるいは学校に通いながら勉強ができるようになっています。

日本語センターとフィリピン日本語文化学院両校の2000年度日本語能力試験１、２級合格者（後列）と教職員（前列。一番右側が筆者）

フィリピン日本語文化学院の10年

これに対して、フィリピン日本語文化学院は、全日制集中コース、日本語教師養成コース、翻訳者養成コースと日本語のプロを目指す人のための専門コースを設けています。

本学院は1992年に日本留学予備教育の学校として設立され、当初は全日制集中コースだけでした。

全日制集中コース：

このコースは、毎年１回開講、期間は10カ月で、月曜から金曜まで毎日５時間クラスがあります。毎年10名前後の学生を受入れ、日本人教師とフィリピン人教師３名で教えています。初心者を10カ月で２級に合格させることを目標にしていますが、実際に合格できるのは、２～３人で、年によっては合格者ゼロということもあります。このコースで学べば、日本語能力試験の４級に１カ月で合格、３級には４カ月で合格できますが、３級と２級の差があまりに大きいために、２級にはなかなか合格できないのが現状です。

この集中コースの卒業生は、過去10年で約100名になりましたが、この内半数は奨学金を得て日本に留学することができ、高度な日本語力を身につけています。２級程度の日本語力を身につけてから日本に留学すれば、たとえ半年だけでも大きな効果が望めますので、集中コースの修了生全員が卒業後日本に留学できれば良いと思います。ただ、残念ながら、一般のフィリピン人にとっては、私費で日本に留学することは経済的に無理ですので、奨学金が増えることを切に願っています。

日本語教師養成コース：

日本語教師養成コースは、質量ともに不足しているフィリピン人日本語教師を養成するために1998年に開講され、国際交流基金派遣の日本語教育専門家が担当してきました。特に昨年８月まで３年に亘って担当された佐々木智子専門家のおかげで、徐々に成果があがってきつつあります。

翻訳コース：

翻訳コースは、英語から日本語への翻訳クラスを年に１，２回開講、日本語から英語への翻訳クラスも随時開講しています。将来的には、日本語とフィリピン語間の翻訳クラスや日本語ー英語ーフィリピン語の通訳コースも開講したいと考えています。

近年、企業レベルでも個人レベルでも、日本とフィリピンの間の交流は増えています。その際の言葉と文化の壁を越えるには、お互いが相互理解に努めることが必要です。私どもの学校では、フィリピン人が日本語と日本文化を理解するためのお手伝いを今後とも地道に続けていきたいと思っています。

教材紹介

『Basic Japanese for Students　はかせ　留学生の日本語初級45時間』
『改訂版　留学生のための論理的な文章の書き方』

『Basic Japanese for Students　はかせ　留学生の日本語初級45時間』

山﨑佳子　土井みつる

外国語を学習している時、時間がもっとあったらなあと思う。教えられることは理解できるし、学習はおもしろいと思う。その外国語ができるようになりたいから、学習意欲は十分で授業態度もまじめである。しかし、実際は授業に駆けつけるのがやっとのことで、前に習ったのは何だっけと、授業のある日に慌ててテキストを開けてみる。

こんな学習者もけっこういるのではないだろうか。

多忙な学習者に

『Basic Japanese for Students　はかせ　留学生の日本語初級45時間』（以下BJS）が対象としている研究留学生や研究員は、まさにこのようなタイプの学習者である。予習復習に時間を取るのが困難なのはもちろんのこと、研究活動が本務であるから、専門の講義や実験、学会発表、論文執筆などがある時にはそちらが優先され、日本語のクラスを欠席しなければならない。

このような多忙な学習者に対応して、BJSは次のような特色を持っている。

BJSの特色

（1）日本語表記（ルビ付き）にローマ字を並記、必要に応じて英訳が添えられている。また、新出語彙は提出の箇所にまとめてリストアップされており、英語で書かれた文法説明も、簡潔に記述されている。

（2）来日して間もない日本語能力ゼロの留学生が、日常生活や研究生活で遭遇すると思われる場面を多く取り上げ、それに関連する情報や実用的な要素を多く載せている。

（3）１回(１コマ、90分）完結型なので、クラスに出席した時は、まとまった形で学ぶことができる。

（4）成人の学習者が楽しめる話題を多く扱っている。

（5）効果的な学習をねらって、イラストが豊富に使われている。

（6）文型の導入及びパターンプラクティスのあとで、コミュニケーションスキルを伸ばすために、タスクタイプの練習問題が多く用意されている。研究留学生を意識して、発表形式の練習も用意されている。

要するに、学習者の負担を少なくした上で、いかに効率的に、また、楽しく日本語が学習できるかということを考えて作られている。

BJSの文法

さらにBJSが特徴的なのは、サバイバル的な教科書とはいえ、文法の学習がおざなりにされていないことである。本務が多忙になると、コースの途中で日本語の学習を断念する学習者がいる。しかし、日本語の学習がいやになったわけではないから、時間ができた時に再び取り組みたいと思っている学習者も少なくない。文法をきちんと積み上げていけば、学習を再開しやすいし、自分のレベルを知ることも容易である。

BJSでは、文法の積み上げを意識して課が構成され、並べられている。動詞と形容詞の活用形はすべて学べ、それらを含む初級前期の文法項目が系統的に提出されている。

BJSは教師にやさしい

さて、BJSは多忙な学習者のみならず、多忙な日本語教師にもハンディな教科書であると言えよう。先にも述べたように豊富なイラストがあるために、絵カードなどあれこれ教材を準備する手間も軽減されるし、文法説明はすべて本文中に書かれているから、すぐに学習者に示すことができる。あとは、それぞれの学習者の必要や状況に応じて、活用していただければと思う。

第３課：それは　なんですか

Basic Japanese for Students
はかせ　留学生の日本語初級45時間

Ｂ５判　330頁　2,200円
監修：東京工業大学留学生センター
著者：東京工業大学留学生センター日本語教育研究会
山崎佳子　土井みつる

改訂版
留学生のための論理的な文章の書き方

Ｂ５判　124頁　1,400円
著者：二通信子　佐藤不二子

『改訂版　留学生のための論理的な文章の書き方』

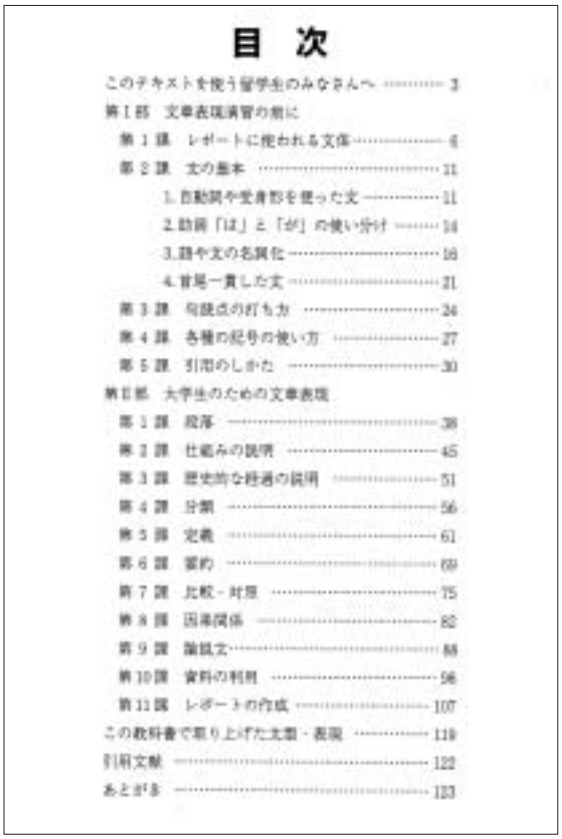
北海学園大学教授　二通信子

この教科書は留学生を対象に、日本語で論理的な文章を書けるようになることをめざして作成したものです。2000年３月に初版が出版されて以来、多くの大学や日本語学校で使われていますが、今回、様々な点で改良を加え改訂版を出すことになりました。教科書としての基本的な考え方や構成は同じですが、読解文や文章例の一部を新しい情報を盛り込んだものに替え、学習者に新鮮な内容で学習してもらえるようにしました。作文課題や文章作成に関する説明も、これまでの実践を踏まえ一部分書き直しました。特に、レポート作成までの過程をより詳しく示し、実際のレポート作成に役立つようにしました。

大学でのレポートや論述試験などで求められる文章は、自分の経験や気持ちを自由に叙述するいわゆる生活作文や感想文とは様々な点で異なっています。正確で明快な文で書くことはもちろんですが、論理的な考察や客観的な叙述が求められます。文章全体や段落内の構成にも注意し、論の組み立てを明確に示すような構造で書くようにしなければなりません。また、他の文献を参照したり資料を使って述べるなど、自分の外部にある理論や情報と対話をしながら書くことが求められます。そしてその際、客観的な事実、他人の文章からの引用、自分の意見のそれぞれを明確に区別して提示する必要があります。学部段階の留学生の多くは、母国での教育において論理的な文章の書き方を学習した経験がほとんどないようです。したがって、大学入学後または入学前の日本語の文章表現の学習の中で、上に挙げたような点を意識的に学習する必要があります。

この教科書は第Ⅰ部と第Ⅱ部に分かれています。第Ⅰ部では、論理的な文章を書くための基礎を学びます。第Ⅱ部の第１課では段落の構成を、第２課から第10課ではそれぞれの目的に応じた文章の書き方や表現などを学び、第11課ではレポートを完成させるまでの過程についてレポートの実例を参照しながら学びます。第Ⅱ部のそれぞれの課は、読解文、文型・表現、作文課題の三つから構成されています。読解文の目的は、文章の展開方法や段落相互の関係、文型・表現などを実際の文章から学ぶことにありますが、それと同時に、大学での学習に必要な背景的な知識を広げることも目指しています。そのために、「外国人の政治参加」「バリアフリー」「お魚増やす植樹運動」「若者の無業化」など現在の日本社会に関する興味深い話題を取り上げています。作文課題では、各課の目的に合わせて原稿用紙１～１枚半程度の文章を書きます。こうした短い文章の中で、段落の構成を意識しながらまとまりのある文章を書くことを学びます。

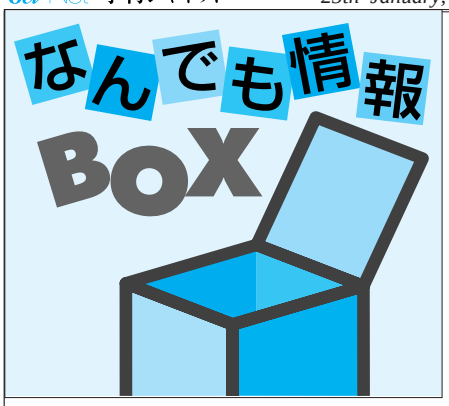
文章を書く力は、実際に書くという経験の中でこそ身につくものです。それもただ書きっぱなしというのではなく、読み手の視点からのフィードバックを得て、自分の間違いや不十分さに気付き書き方を改善していくことを繰り返す中で習得されるものです。そうした考え方から、この教科書は教師の指導の下で使われることを想定しています。また、教師のための指導の手引きも添えてあります。この教材が多くの方にご利用いただければ幸いです。



目　次

このテキストを使う留学生のみなさんへ …… 3
第Ⅰ部　文章表現演習の前に
第１課　レポートに使われる文体 …… 6
第２課　文の基本 …… 11
1. 自動詞や受身形を使った文 …… 11
2. 助詞「は」と「が」の使い分け …… 14
3. 語や文の名詞化 …… 18
4. 首尾一貫した文 …… 21
第３課　句読点の打ち方 …… 24
第４課　各種の記号の使い方 …… 27
第５課　引用のしかた …… 30
第Ⅱ部　大学生のための文章表現
第１課　段落 …… 38
第２課　仕組みの説明 …… 45
第３課　歴史的な経過の説明 …… 51
第４課　分類 …… 56
第５課　定義 …… 61
第６課　要約 …… 69
第７課　比較・対照 …… 75
第８課　因果関係 …… 82
第９課　論証文 …… 88
第10課　資料の利用 …… 96
第11課　レポートの作成 …… 107
この教科書で取り上げた文型・表現 …… 119
引用文献 …… 122
あとがき …… 123

本書・目次部分より



ほん BOOKS

本誌に表示した価格は税別です。

みんなの日本語初級Ⅰ
導入・練習イラスト集（仮題） 3月発売予定 2,200円

「みんなの日本語初級Ⅰ」に準拠した導入と練習用のイラスト100枚。切り取ってクラスですぐに使えます。教師用使い方の説明を別冊（80ページ）に掲載しています。

みんなの日本語初級Ⅱ
翻訳・文法解説ロシア語版 3月発売予定 2,000円

こどものにほんご2 発売中 2,000円

新日本語の中級 文法解説書 中国語版 2月発売予定 1,600円

Basic Japanese for Students はかせ 留学生の日本語初級45時間
発売中 2,200円

改訂版 留学生のための論理的な文章の書き方 発売中 1,400円

改訂版 韓国語レッスン初級Ⅰ 発売中 2,400円

改訂版 韓国語レッスン初級Ⅰ CD 発売中 2,800円

日本語文法演習 時間を表す表現-テンス・アスペクト-
2月発売予定 1,300円

時間を表す表現の「する、した、～している」などについて学習するためのテキストです。文法規則を最初に示すのではなく、学習者が問題を解きながら導き出すような構成になっています。上級者向け。

新訂版 日本を知る-その暮らし365日- 2月発売予定 2,200円

［日英対訳］日本で暮らす外国人のための生活マニュアル2003／2004年版
2月発売予定 1,800円

［日中対訳］日本で暮らす外国人のための生活マニュアル2003／2004年版
2月発売予定 1,800円

セミナー SEMINARS

●初心者のための『みんなの日本語初級Ⅰ、Ⅱ』の教え方・東京会場

内容：①『みんなの日本語初級Ⅰ』
②『みんなの日本語初級Ⅱ』
③「中級日本語の教え方を考える～『新日本語の中級』を中心に～」
＊①②は各計10時間③は計4時間

日時：① 2月24日（月）13:00～16:30
2月26日（水）13:00～16:30
2月28日（金）13:00～16:00
② 3月3日（月）13:00～16:30
3月5日（水）13:00～16:30
3月7日（金）13:00～16:00
③ 3月19日（水）13:00～17:00

会場：アジア文化会館（東京都文京区本駒込2-12-13）
講師：飯塚達雄（スリーエーネットワーク日本語講師）
定員：25名（8名より開講）
費用：①②各15,000円 ③6,000円

●『みんなの日本語初級Ⅱ』の教え方・大阪会場

「みんなの日本語初級Ⅱ」の教え方講座・大阪会場は第26課～50課までを各回3時間、全6回（計18時間）で行います。内容、日程等の詳細は下記の通りです。

講師：田中よね、牧野昭子
会場：エル・おおさか
定員：20名（10名より開講）
日程、予定：

A	3月2日（日）	序、第26～28課
B	3月9日（日）	第29～32課
C	3月15日（土）	第33～37課
D	3月16日（日）	第38～42課
E	3月22日（土）	第43～47課
F	3月23日（日）	第48～50課、まとめ

＊時間帯は全て13：30～16：30（3時間）
費用：27,000円（全6回）
＊参加日程希望等は講座係までご相談ください。

問合せ/申込み先：スリーエーネットワーク講座係
〒101-0064 東京都千代田区猿楽町2-6-3松栄ビル
TEL:03-3292-6410 FAX:03-3292-6197
E-mail:ja-net@3anet.co.jp

●スリーエーネットワーク創立30周年記念行事
フォーラム「ことばと学び―昨日・今・明日―」

多文化共生する現代の子どもたちのだれもが社会的・経済的に自立して生きていける大人になるために、「ことばと学び」をめぐって、現場に根ざし、かつ学校教育・地域・日本語教育に関わる方々で全体を見渡した意見交換の場を持ちたい。今回のフォーラムは、このような趣旨の下に弊社の創立30周年を記念して企画いたしました。皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

【フォーラム日時（予定）】
日時：2003年8月22日（金）10：30～16：30
（開場：10：00、昼休み：90分）
会場：東京都内を予定
定員：250人
お申し込み：
2003年の春頃を予定しております。詳細はHP、Ja-Net25号（4月末）にてお知らせいたします。

『ことばと学び フォーラム』HPを開設しました！
□『ことばと学び フォーラム』の情報
□全体会の先生方のメッセージ
□当日実り多い意見交換をするための「掲示板」
ぜひお訪ねください!
http://www.3anet.co.jp/kotobatomanabi/index.html

お知らせ INFORMATION

●スリーエーネットワーク研修・教育事業のご案内
外国人への日本語研修のご相談は、スリーエーネットワーク研修部までお問い合わせ下さい。研修部案内書を送付いたします。
問合せ：スリーエーネットワーク研修部
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-64田中ビル
TEL：03-3292-6193 FAX：03-3219-2890
E-mail：kenshu@3anet.co.jp
http://www.3anet.co.jp/kenshu/index.html

●2003年スリーエーネットワーク目録ができました
スリーエーネットワークで発行されている日本語教材、一般書等、図書のすべてが収録されています。図書目録をご希望の方(国内のみ）は送付先（お名前、ご住所）を明記の上、ja-net@3anet.co.jp宛にお申し込みください。

●皆様からの投稿や各コラムへのご質問、ご意見等をお待ちしております。採用させて頂いた方には粗品を進呈いたします。また本誌をご希望の方は、お名前、ご住所、所属をFAX等で編集室までお知らせください。無料でお届けします（国内のみとさせて頂きます）。『Ja-Net』第25号は4月25日発行予定です。

Ja-Net 季刊ジャネット No.24

スリーエーネットワークという社名は、アジア（Asia）、アフリカ（Africa）、ラテン・アメリカ（Latin America）のいわゆる発展途上国の多くが存在する3つの地域をネットワークでつなぎ、相互理解と友好の促進を図ろうという趣旨をシンボライズしています。

2003年1月25日発行
●発行人 藤嵜政子
●発行所 （株）スリーエーネットワーク
〒101-0064 東京都千代田区猿楽町2-6-3 松栄ビル
Ja-Net編集室 TEL 03-3292-6410 FAX 03-3292-6197
営業部 TEL 03-3292-5751 FAX 03-3292-6195
http://www.3anet.co.jp E-mail: ja-net@3anet.co.jp
●印刷 日本印刷（株）
© 2003 by 3A Corporation Printed in Japan（禁無断転載）

再生紙使用